

# 「日本語教師の専門性とキャリアについて考えるワークショップ」の実践 —「ウチの見直し」と「ソトへの拡張」—

藤原 恵美・竹内 雪乃・館岡 洋子

## 要 旨

本稿は、「専門性の三位一体モデル」(館岡 2019, 2021)に基づき、自身の日本語教師としての理念(日本語教育観)を明らかにし、そこから今後のキャリアを考えることを目的として行われた全4回のワークショップの報告である。ワークショップの第1回では、参加者が大切にしている想いを明らかにし、日本語教師としての実践から立ち上がる「私の理念」を考えた。第2回では、現在行っている日本語教育実践における三者(理念・方法・フィールド)のつながりを可視化した。第3回では、ゲストスピーカーを招き日本語教師の越境事例を語ってもらい、他者の経験談から日本語教師の可能性を考えた。第4回では、過去から現在に至る日本語教師としての自身を振り返り、今後のキャリアについて考えた。本稿では、このワークショップのデザイン上の工夫およびその可能性について述べる。

## キーワード

日本語教師の専門性 キャリア形成 省察 理念 ファシリテーターの役割

## 1. 問題意識とデザインの意図

### 1.1 なぜ日本語教師の専門性を考える場が必要なのか

2020年頃から始まった新型コロナウイルスの感染拡大の影響により日本語教育の現場は大きく変化し、日本語教師はこれまでの教育実践を見直さなければならなくなった。オンライン授業への移行により、教師には従来以上にICTのスキルが必要とされると同時に、今後のAIの発展や教育界への導入によっては、今まで日本語教師が担当していた教育活動の一部が機械にとってかわられるという状況も現実のものとなりつつある。今多くの日本語教育の現場では、オンライン授業、および様々なオンライン学習ツールの活用に対応するための教師研修が実施されている。しかし、このような変化の激しい状況下においてこそ、教師一人ひとりが自身の実践を省察する場が必要なのではないだろうか。岡崎・岡

崎(1997)は「知識をもっているということと、実際の問題に直面したときそれらの知識を適用し問題解決を図るということは同じではあり得ない」(p.9)と述べている。さらに、教師養成や研修においては「〈なぜ、つまりどのような原則や理念に基づいて〉教えるかということ、自分なりに考えていく姿勢を養い、それを実践し、その結果を観察し改善していく」(p.10)ことが教師の成長を実現させるという考え方を示している。教師研修などの教師の学びの場においては、知識やスキルを伝達するだけでなく、その知識やスキルをどんなときにどのように使うのか、なぜ使うのかといった省察を促す取り組みも必要である。

筆者らは、このような変化の時にこそ、日本語教師という職業の「軸」となる自身の理念(日本語教育観)を教師一人ひとりが省察する機会が必要であると考えた。自身の理念(日本語教育観)を明確化することは、日本語教師が直面する問題の解決に向けてどのような方法をとればよいのか、その方法の選択を助けてくれると考えるからである。

## 1.2 なぜ日本語教師のキャリアを考えるのか

日本語教師という仕事は、キャリアという観点からみれば、先行きが見えない悩ましい仕事だといえるだろう。

その理由の一つは、今まで日本語教師には公的な資格制度がなく、ようやく議論が始まったばかりだからである。外国人材が増加し、2018年に「出入国管理及び難民認定法」(入管法)が改正された。翌2019年には「日本語教育の推進に関する法律」(日本語教育推進法)が施行され、社会的にも日本語教育の必要性が可視化されてきた。この法律は、日本語教育の充実、拡充を促すためのものであり、外国人が日本語を習得することができるよう国、地方公共団体や企業等の支援を義務づけている。ようやく政策のレベルで日本語教育が正面から取りあげられるようになったかに見える。日本語教師という仕事が社会的に重要度を増す中で、日本語教師の公的な資格制度が議論されているが、まだ検討すべき課題は多い。

また、日本語学校などでは非常勤の職が多く、雇用が安定しないという現実がある。新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止に向けた水際対策強化の一環として、外国人の入国が制限されたことにより、多くの日本語学校が経営難に陥った。多くの非常勤講師の担当コマ数が減らされたり、さらには閉校に追い込まれる日本語学校が見られたりした。このように社会変動の影響を受けやすく不安定な仕事が日本語教師の仕事なのである。

そもそも日本語教育という分野は、様々な就業経歴を持つ人が参入している職業分野である。前職を退職して日本語教師に転職したとしても、今まで培ってきたスキルや経験が直接的に活かせるとはかぎらないために、せっかく多様な背景を持つ人々が集まっても、経験が十分活かせないまま辞めてしまうケースもある。

義永ほか(2019)は、「教室で日本語を教える」(p.3)日本語教師に加え「自分の専門性を生かして、日本語を教えたり学んだりする人を支援する役割を果たす人たちのこと」(p.4)を「日本語教育者」(p.4)と呼び、日本語教育分野における多様な活動事例を紹介している。日本語教師の周辺には、様々な選択肢があることがうかがえる。中央教育審議会(2011)は、「人は、他者や社会とのかかわりの中で、職業人、家庭人、地域社会の一

員等、様々な役割を担いながら生きて」おり、「様々な役割の関係や価値を自ら判断し、取捨選択や創造を重ねながら取り組んでいる」としたうえで、キャリアを「人が、生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見いだしていく連なりや積み重ね」と定義している (p.17)。ここでは、キャリアは個人の職業的側面だけをとらえる概念ではないとの見解が示されている。また、人は、「自分の役割を果たして活動すること、つまり『働くこと』を通して、人や社会にかかわることになり、そのかわり方の違いが『自分らしい生き方』となっていく」(p.17) と述べられていることから、キャリアは個人の「生き方」または「人生」そのものであるととらえられているといえよう。そうであれば、日本語教師のキャリアを考えるうえで、個人の職業的側面のみならず「自分らしい生き方」を考えるという視点も必要であろう。しかし、日本語教師が、自身のこれまでのキャリアを振り返り、将来の働き方や生き方を考える場は多いとはいえないのではないだろうか。筆者らは、日本語教師がそれぞれの経験を共有し、異なる背景を持つ他者と語り合うことで、自身の可能性を拡げることができるのではないかと考え、本ワークショップをデザインし、実施した。

## 2. ワークショップの実践

### 2.1 ワークショップのコンセプト

筆者らは日本語教師の専門性を考える研究会（以下、NKS研究会）<sup>1</sup>において、「日本語教師の専門性とは何か」について多くの勉強会を重ねてきた。本稿では、館岡（2021）に基づき、「日本語教師の専門性」を「どんな日本語教育を実現するのかといった自身の理念（日本語教育観）とどんな特徴をもったフィールド（ことばの教育現場）なのかといったフィールドの固有性との間で最適な方法を編成し実現できること」(p.104) と定義する。そして、「理念と方法とフィールドの三者を連動した一貫性のある動的なものとしてとらえるべきだと主張」（館岡 2021、p.105）に基づくモデルを「専門性の三位一体モデル」と呼ぶ。「専門性の三位一体モデル」についての詳細は館岡（2019、2021）を参照されたいが、以下に「専門性の三位一体モデル」の特徴を3つ述べる。

まず、「専門性の三位一体モデル」は、専門性を〇〇ができるといったように能力をリスト化して固定的にとらえるのではなく、その都度、フィールドにあったやり方を工夫し編成し続けていくという動的なものとしてとらえている。そして、「フィールド」「方法」「理念」の三者が一貫性をもっているかどうかを重視している。だれかのある方法が自身のフィールドでそのまま使えるわけではなく、自身の文脈において、ふさわしい方法かどうか判断できることが重要である。

次に、「専門性の三位一体モデル」は、理念（日本語教育観）の重要性を主張する。教師たちは、初級にはこの方法、中級にはあの方法といった具合に「フィールド」と「方法」との結びつきを重視する傾向がある。しかし、そこでは、何をめざしているのかといった「理念」が不在である。そこで、このモデルでは三者のうち、とくに日頃明確化していない理念（日本語教育観）を明確化することを重視する。

最後に、「専門性の三位一体モデル」は、社会の中に埋め込まれているととらえている。図



図1 社会に埋め込まれた三位一体

1にあるように、「日本語教師としての私」は「フィールド」の中で実践を行っている。実践は自身の三者に一貫性があるだけでは成り立たない。「日本語教師である私」は「私」の一部であり、自身の置かれている環境、今までの経験やキャリアからも影響を受けている。たとえば、自身の教室実践は教室がおかれている学校という文脈の中に埋め込まれており、学校は地域や社会の中に埋め込まれている。また、自身の家族や仕事へのかかわり方も社会と深く繋がっている。つまり、周囲とのかかわりや交渉なくして三位一体は成り立たないのである。

筆者らが実施したワークショップは、上記の「専門性の三位一体モデル」の枠組みに基づいている。本稿では、2022年8月から9月に4回にわたって行われた「『日本語教師』の専門性とキャリアについて考えるワークショップ」（早稲田大学大学院日本語教育研究科オンライン講座）<sup>2</sup>について記述する。

## 2.2 ワークショップのデザイン

4回のワークショップは前半と後半の2部で構成されている。前半2回は、自身の実践を見直すことを目的とし、「ウチの見直し」を行った。具体的には、「専門性の三位一体モデル」の枠組みを用い、自身が日々行っている日本語教師の仕事を「フィールド」「方法」「理念」という観点から振り返り、自身の日本語教育観を明らかにし、三者の一貫性を検討した。後半2回は、日本語教師のキャリアをとらえる視点を、現在の自身の実践から今後の可能性へと広げることを目的とし、「ソトへの拡張」を試みる活動を行った。具体的には、自身の経験やリソースを振り返り、社会における自身の位置づけを確認したのち、自身の日本語教師としての可能性を考える活動を行った。

ワークショップの実施に当たっては、参加者の対話の時間を増やすこと、参加者の振り返りを促すこと、参加者に安心して対話に参加してもらえる場を作ることを心掛けた。そのために、グループセッションの前には必ず「ワークショップの場で得た個人の情報は外部に漏らさない」「自己開示の範囲や程度などは自分で決める」「相手の語りを尊重して聞く」「話し手の時間を奪わない」「アドバイスをしない」などのグラウンドルールを参加者と共有した。

参加者の対話の時間を増やすために、グループセッションの際には2～3名の参加者につきファシリテーター1名がグループに加わった。ファシリテーターは、参加者の発言が偏らないよう配慮し、参加者が語りや問いかけに集中できるよう司会進行や時間管理を行った。また、表面的な話に終始しないよう「話し手」の省察を促すための問いかけを行った。講座後には、参加者のさらなる振り返りを促すために、振り返りの記述を毎回の課題とした。

### 2.3 ワークショップの概要

本ワークショップはオンライン（Zoom）で1回2時間、4週間連続して行われた。ワークショップの期間中は、企画者と参加者が利用できるプラットフォーム Waseda Moodle for Recurrent Education（以下、Moodle）を介して、アナウンス、資料や振り返りの共有、交流が行われた。また、ワークショップには、筆者ら企画者3名以外に、TA 2名が参加した。

ワークショップ開始前、参加者には事前課題を提示した。事前課題では、「これまで行ってきた授業の中で印象に残っているエピソードは何か」、「なぜそのエピソードが印象に残っているか」を考えてきてもらった。また、参考資料として館岡（2019）の論文を提示し、事前に読んでおくことを勧めた。

本ワークショップでは、「エピソードシート」（図2）、「三位一体シート」（図3）、「私のキャリアビジョンシート」（図4）、「キャリアを拓げるアイデアマップ」（図5）の4つのシートを省察ツールとして活用した。シート類はMicrosoft Power Point（以下、PPT）で作成し、オンライン上で配布した。PPTを使用した理由は、PPTは多くの日本語教育の現場で使われており、参加者にとって使いやすいツールであるからである。シートに記載される情報が個人情報であることを勘案し、Google Driveなどのオンラインストレージを利用しての共有は避け、所有者自身で管理してもらうこととした。

表1 2022年度「日本語教師」の専門性とキャリアについて考えるワークショップ（全4回）の構成

回	内 容	目 標	方 法
1	「エピソード・ワークショップ」 自身の理念をあぶり出す	自身の印象に残ったエピソードから、理念を明らかにする	講義、「エピソードシート」を用いてのワークショップ、振り返り
2	「三位一体ワークショップ」 三位一体モデルから自身の実践を省察する	「三位一体シート」を使って、日本語教師としての自身の理念を明らかにし、三者（理念・方法・フィールド）のつながりを可視化する	「三位一体シート」を用いてのワークショップ、振り返り
3	多様な拡張事例／越境事例を聞く	多様なフィールドで実践を行う日本語教師の話聞き、自身の働き方について考える	ゲストスピーカー2名の講演、講義、振り返り
4	これからの自身のキャリアを考える	今までのキャリアを振り返り、自身のキャリアを考えるうえで可能性を拓げる	「私のキャリアビジョンシート」「キャリアを拓げるアイデアシート」を用いてのワークショップ、振り返り

## 2.3.1 ワークショップ第1回

第1回は、事前課題で考えてきた「印象に残ったエピソード」から、参加者が自身の理念（日本語教育観）を明らかにすることを目標とした。グループワークにおいては「エピソードシート」（図2）を使用した。

図2 エピソードシート

表2 ワークショップ第1回（120分）の流れ

	内 容	分
1	講座の内容・目的・オンライン環境についての説明、講師およびTAの紹介、第1回講座の流れの説明	5
2	「専門性の三位一体モデル」についての講義	15
3	グループ活動の説明、グラドルールの共有	5
4	「エピソードシート」（図2）を用いたワークショップ 1. グループにわかれ簡単な自己紹介後、参加者それぞれがシートのAの付箋にエピソードを記入 2. グループセッション ① 「話し手」が自身のシートを共有、簡単に説明 ② 「聴き手」が「話し手」に問いかけ ③ 「話し手」が感想を共有 ④ ①～③を1セッションとし、全員のセッションを実施 3. 全員のセッションが終わったところで、それぞれが付け加えたいことや気づいたことをBとCの付箋に記入 4. グループ内で感想を共有	70
5	全体で振り返り	10
6	「三位一体シート」（図3）について説明、課題の提示 【課題】 Moodleに振り返りコメントを投稿、作成した「エピソードシート」（図2）を見直し後「三位一体シート」（図3）を作成	15

## 2.3.2 ワークショップ第2回

第2回は、参加者が日本語教師としての自身の理念（日本語教育観）を明らかにし、三者（理念・方法・フィールド）のつながりを可視化することを目標とした。シートは「三位一体シート」（図3）を使用した。

②三位一体シート(名前: )

年 月 日記入

A.セッション前記入用

理念

B.付け加えたいこと

方法

C.セッション後の気づき

フィールド

図3 三位一体シート

表3 ワークショップ2日目（120分）の流れ

	内 容	分
1	第1回講座を受講した感想を共有、第2回講座の流れを説明 グループ活動の説明、グランドルールの共有	15
2	「三位一体シート」（図3）を用いたワークショップ 1. グループにわかれ、簡単な自己紹介 2. グループセッション ① 「話し手」が自身のシートを共有、簡単に説明 ② 「聞き手」が「話し手」に問いかけ ③ 「話し手」が感想を共有 ④ ①～③を1セッションとし、全員のセッションを実施 3. それぞれが付け加えたいことや気づいたことをBとCの付箋に記入 4. グループ内で感想を共有	80
3	全体で振り返り	10
4	「私のキャリアビジョンシート」（図4）、「キャリアを拓げるアイデアマップ」（図5）についての説明、課題の提示 【課題】 Moodleに振り返りコメントを投稿、第4回講座で使用予定の「私のキャリアビジョンシート」（図4）・「キャリアを拓げるアイデアマップ」（図5）を第4回講座までに作成	15

## 2.3.3 ワークショップ第3回

第3回は、多様なフィールドで日本語教育実践を行うゲストに話を聞き、参加者が自身の働き方について考えることを目標とした。ワークショップでは日本語教師の枠を超えて様々な活動をしている2名のゲストスピーカー<sup>3</sup>を招き、それぞれの日本語教育とのかかわりやキャリアについて話してもらった。

表4 ワークショップ第3回（120分）の流れ

	内 容	分
1	第2回講座を受講した感想を共有、第3回講座の流れを説明 ゲストスピーカーの紹介	10
2	越境事例① ゲストスピーカーKさん 「越境することで気づいた日本語教師の専門性」 ゲストスピーカーの講演、質疑応答	30
3	越境事例② ゲストスピーカーNさん 「企業内の日本語教育の越境事例」 ゲストスピーカーの講演、質疑応答	30
4	グループにわかれて感想共有、ゲストスピーカーを加え全員で意見交換・質疑応答	30
5	越境・ライフキャリアに関する講義、課題の提示 【課題】 Moodleに振り返りコメントを投稿、第4回講座で使用予定の「私のキャリアビジョンシート」(図4)・「キャリアを拓げるアイデアマップ」(図5)を作成	20

## 2.3.4 ワークショップ第4回

第4回は、参加者自身の今までのキャリアを振り返り、自身のキャリアを考えるうえでの可能性を拓けることを目標とした。シートは、「私のキャリアビジョンシート」(図4)と「キャリアを拓げるアイデアマップ」(図5)を使用した。

③私のキャリアビジョンシート(名前: )      あなたはどんな人生をおくりたいですか？

\_\_\_\_年 月 日記入

仕事活動

※ここに書きます      ※ここに書きます      ※ここに書きます

※ここに書きます      日本語教師      ※ここに書きます

現在      年齢      年齢

個人生活

※ここに書きます      ※ここに書きます      ※ここに書きます

※ここに書きます      ※ここに書きます      ※ここに書きます

図4 私のキャリアビジョンシート



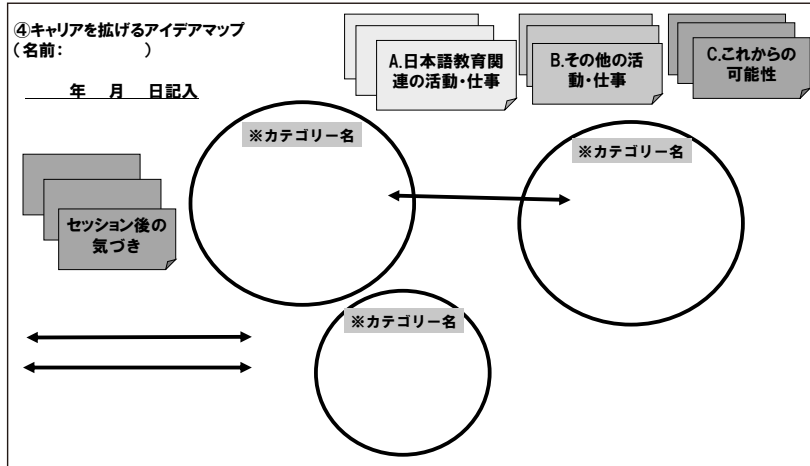


図5 キャリアを拓げるアイデアマップ

表5 ワークショップ第4回(120分)の流れ

	内 容	分
1	第3回講座を受講した感想を共有、第4回講座の流れを説明 グループ活動(1)の説明、グランドルールの共有	10
2	グループ活動(1): 現在と過去を振り返るワークショップ 1. グループにわかれる 2. グループセッション ① 「話し手」が「私のキャリアビジョンシート」(図4)を用いて現在と過去を説明後、「キャリアを拓げるアイデアマップ」(図5)を説明 ② 「聞き手」が「話し手」に質問、コメント ③ ①②を1セッションとし、全員のセッションを実施	60
3	グループ活動(2)の説明	5
4	グループ活動(2): 将来を考えるワークショップ 1. グループにわかれ、グループ活動(1)で気づいたことを付箋に記入 2. グループセッション それぞれが「私のキャリアビジョンシート」(図4)の将来の部分や「あなたはどんな人生をおくりたいですか?」の部分の説明 3. グループメンバー全員のセッション後、感想を共有	25
5	ワークショップのまとめ 4回講義で学んだことについて感想を全体で共有 課題の提示と受講後アンケートのお願い 【課題】 Moodleに振り返りコメントを投稿	20
6	懇親会(任意)	

## 2.4 ワークショップ実施上の工夫

筆者らは、「専門性の三位一体モデル」(館岡 2019, 2021)に基づき、自身の日本語教師としての理念(日本語教師観)を明らかにし、そこから自身のキャリアを考えるうえで

の可能性を拡げることを目的としてワークショップをデザインした。以下では、目的を達成させるために、ワークショップを実施するプロセスにおいて、筆者らが行った工夫について述べる。

#### 2.4.1 グランドルールを徹底する

本ワークショップでは、毎回、前述のグランドルールを参加者と共有した。グランドルールは、ファシリテーターが参加者の発話を促すうえでも常に心掛けたことでもあった。グランドルールを提示することによって、「聴き手」が自身の価値観に基づいて「話し手」の話を遮ったり、自分の話を始めたりすることは、本ワークショップにおいて望ましくない行動であるとの認識を参加者と共有することができた。その結果、「話し手」は自分のために確保された時間の中で安心して話すことができ、「聴き手」は「話し手」の話を理解するために聴いたり、問いかけを行ったりすることができたようであった。グランドルールの共有は、ワークショップを安心安全な場とする雰囲気作りに加えて、「話し手」および「聴き手」の役割を明確にする効果があったといえる。

#### 2.4.2 参加者の省察を促す

本ワークショップでは、参加者の省察を促すために、2つの工夫を行った。省察を促すツールの開発とファシリテーターとしての目標の共有である。

まず、省察ツールとしてのシート類の開発である。本ワークショップでは、参加者の省察を促すために、「エピソードシート」(図2)、「三位一体シート」(図3)、「私のキャリアビジョンシート」(図4)、「キャリアを拡げるアイデアマップ」(図5)の4つのシートを開発した。参加者は、1～2週間かけて課題として提示されたシート類に記入した。ワークショップのグループ活動の中では、それらを共有しながら他の参加者と対話を行った。グループセッションにおける対話の前に、自身の考えをシート上で言語化する時間が十分にとられていたことが対話を充実させることにつながったと考えられる。シート類の開発の目的は、参加者が考えや想いを可視化することである。自身の心の内にある考えや想いを言語化する作業は容易ではない。しかし、グループセッションにおいては、シートに書かれたことばを手掛かりとして、「話し手」は自身の考えや想いを語り、「聴き手」は「話し手」に問いかけを行った。グループセッションにおいては、「話し手」が「聴き手」からの問いかけに答えることで省察が促され、自身の考えや想いから「私の理念」や自身の将来像をことばにしていくという場面もみられた。

次に、ファシリテーターとしての目標の共有である。筆者らは、参加者の省察を促すために、NKS研究会(前出)において、ファシリテーターとしての在り方を模索し勉強会を重ねてきた。本ワークショップにおいては、各ワークショップの前に、ファシリテーターが集まり、打ち合わせを行った。打ち合わせの中で、ファシリテーターとしての自分なりの目標を決め、ワークショップに臨んだ。例えば、「参加者から何度も出てくることばについて掘り下げる」や「参加者の語りをよく聞き、アドバイスをしない」などであった。ワークショップ後には、その目標が達成できたかをファシリテーター全員で共有した。お互いのファシリテーターとしての取り組み方を尊重しながらも、参加者の省察を促すためにはどうすればよいのか、よりよい方法について検討した。話し合いの際には、グループセッションにおいて話し合われた内容を持ち出さないことや参加者の個人情報には

触れないことに留意し、ファシリテーターの行動に焦点をあてて検討するよう心掛けた。ファシリテーターとしての自身の働きかけが参加者の省察の促しにつながったとの手ごたえも感じられ、ファシリテーターとしてのスキルの研鑽が参加者のさらなる省察を促す可能性が見出されたといえよう。

#### 2.4.3 参加者の視野を広げる

第3回では、日本語教師の枠を超えて様々な活動をしているゲストスピーカー2名に参加してもらい、日本語教師としての歩みやキャリアについて「私のキャリアビジョンシート」(図4)を提示しながら話してもらった。ゲストスピーカーのKさんは、個人や企業で日本語を教えるフリーランスの日本語教師である。また、外国人材を対象としたキャリアコンサルタントや学習アドバイザーとしても活躍している。Nさんは、日系企業の海外拠点において社員の日本語教育に携わった経験を持ち、現在は日本の企業で外国人材育成業務に携わっている。ゲストスピーカーの語りは、「日本語教師=日本語を教える人」という固定概念を打ち破るものであり、これまでの就業経験や家庭生活で培ったスキルも日本語教育において活かすことができるという可能性を参加者に示すことができたといえよう。今後のキャリアを考える第4回の活動に向けて、ゲストスピーカーのキャリアの事例は、参加者にとってよい刺激となったと考えられる。

### 3. 考察—ワークショップの可能性—

筆者らは、参加者に日本語教師の専門性とそのキャリアの可能性を考えてもらうことを意図して、ワークショップをデザインした。以下に本ワークショップの実践を振り返り、その可能性を述べる。

まず、本ワークショップでは、様々な工夫を凝らした「ウチの見直し」により、自身の実践を支える「軸」となる理念(日本語教育観)を明らかにした。日本語教師の主な業務の一つは目の前の学習者に日本語を教えることであり、「学習者主体」を目指して学習者の要求に耳を傾けることは重要なことである。しかし、実践の「軸」となる自身の理念(日本語教育観)がない状態で、「学習者主体」の名のもとに安易に目の前の実践の取り組みを変えてしまえば、自身の実践に常に不安や迷いをもち続けることになりかねない。社会が大きく変化している今だからこそ、日本語教師がよりよい実践に向けて次の行動へ踏み出すために、「軸」となる自身の理念(日本語教育観)を明確にすることが必要である。そして、その理念(日本語教育観)を可視化させるためには、自身には見えない部分を掘り下げてくれる他者と共に自身を見つめる場が必要となる。筆者らはこの自身の理念(日本語教育観)を持ち、それに基づいてどんなフィールドにおいても実践を行うことができることが日本語教師の専門性であると考えられる。つまり日本語教師の専門性とは「外側から規定されるのではなく、自身が『日本語教師であるということはどういうことなのか』と日本語教師としての存在の意味を自身の内から問うこと」(館岡 2021, p.98)であり、本ワークショップは参加者にとって、自身の専門性を考える糸口になったのではないだろうか。

次に、「ソトへの拡張」により、日本語教師のキャリア支援につながる取り組みを行った。文化庁国語課(2021)によると、国内の日本語教育実施機関・施設等で教える日本

語教師等の数は、2021年度時点で39,241人であり、職務別の割合は、「常勤による者」が15.7%、「非常勤による者」が36.3%、「ボランティアによる者」が48.0%である (p.7)。常勤という安定した雇用形態で働く日本語教師の割合が少ないことがわかる。また、非常勤教師は、コマや時間単位で契約を結んでいることが多く、景気変動や感染症拡大などの社会変化の影響を受けやすいため、自身が思い描いたとおりに働くことが難しい立場でもある。不安定な立場で働く多くの日本語教師に向けたキャリア支援も必要となる。本ワークショップでは、日本語教師一人ひとりが自身の経験を語り、今持っているスキル・能力を社会でどう活かしていくのかを考えた。多様な背景を持った日本語教師がそれぞれの経験を語り合うことで新しいアイデアも生まれ、参加者が生き生きと自身の将来について語る場面も見られた。こうした場が、日本語教師一人ひとりのキャリアを考える場となりえる可能性が示されたといえるのではないだろうか。

多文化共生社会の実現に向け、現在日本語教師という仕事が社会的に重要度を増している。日本語教師たち一人ひとりが自身の理念（日本語教育観）という「軸」を持って実践を創っていくことにより、それぞれが自身の実践に自信をもち、さらには主体的なキャリアをも創っていくことになるだろう。そのような日本語教師が増えていくことは、これからの日本語教育の現場を変えていくことにもつながる。今後、日本語教師が周囲の人に影響を与え、日本語教育に関心を持つ人を増やすことにつながることに期待したい。

#### 4. おわりに

本稿では、日本語教師の専門性とキャリア支援を考えて実施したワークショップについて報告した。筆者らは、社会が大きく変化するときこそ、他者とともに自身の実践や理念（日本語教育観）について語り合い、自分らしいキャリア、そして生き方を考える場が必要であると主張する。今後こうした場をより多く設け、多様な背景を持つ日本語教師と共に、日本語教師のさらなる可能性について考えていきたい。

最後に、本ワークショップの今後の課題について述べる。本ワークショップでは、省察ツールとして「エピソードシート」(図2)、「三位一体シート」(図3)、「私のキャリアビジョンシート」(図4)、「キャリアを拡げるアイデアマップ」(図5)を用いた。今後は、これら省察ツールを再度見直し、改善したうえで、ワークシートを使用する目的を十分に参加者に伝えるにはどうしたらよいかをさらに検討していく必要がある。また、本ワークショップではファシリテーターを含む「聴き手」の問いかけや姿勢が「話し手」の省察の深さに大きくかかわっていることが観察された。今後も、引き続きファシリテーターのあり方について実践と議論を重ね、スキルの向上を目指したい。

#### 注

- 1 日本語教師の専門性を考える研究会 (NKS研究会) HP <<https://nihongokyooshi-senmonsei.com/>>
- 2 2023年は10月から11月にかけて4回行われる予定。<<https://www.waseda.jp/fire/gsjal/open-2/workshop/>>
- 3 この2名については、館岡 (2023) 「キャリアとしての日本語教師—多様な働き方におけるキャリア自律の必要性—」の中にも登場する。

## 参考文献

- 岡崎敏雄・岡崎眸（1997）『日本語教育の実習—理論と実践—』アルク
- 館岡洋子（2019）「『日本語教師の専門性』を考える—『専門性の三位一体モデル』の提案と活用—」  
『早稲田日本語教育学』26、pp.167-177<<http://hdl.handle.net/2065/00062888>>（2023年2月14日）
- 館岡洋子（2021）「『専門性の三位一体モデル』の提案」館岡洋子編『日本語教師の専門性を考える』  
第6章、ココ出版、pp.97-110
- 館岡洋子（2023）「キャリアとしての日本語教師—多様な働き方におけるキャリア自律の必要性—」  
『早稲田日本語教育学』34、pp.59-70
- 中央教育審議会（2011）「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」<[https://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2011/02/01/1301878\\_1\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/02/01/1301878_1_1.pdf)>  
（2023年2月14日）
- 文化庁国語課（2021）「国内の日本語教育の概要—令和3年度 日本語教育実態調査報告書—」<[https://www.bunka.go.jp/tokei\\_hakusho\\_shuppan/tokeichosa/nihongokyoiku\\_jittai/r03/pdf/93791201\\_01.pdf](https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/nihongokyoiku_jittai/r03/pdf/93791201_01.pdf)>  
（2023年2月14日）
- 義永美央子・嶋津百代・櫻井千穂（編著）（2019）『ことばで社会をつなぐ仕事—日本語教育者のキャリア・ガイド—』凡人社

（ふじわら めぐみ 早稲田大学日本語教育研究センター）  
（たけうち ゆきの 早稲田大学大学院日本語教育研究科・修士課程修了）  
（たておか ようこ 早稲田大学大学院日本語教育研究科）